仙台城下「町人列伝」⑮

全国有数の名馬が集まる 仙台馬市のまとめ役「山崎平五郎」

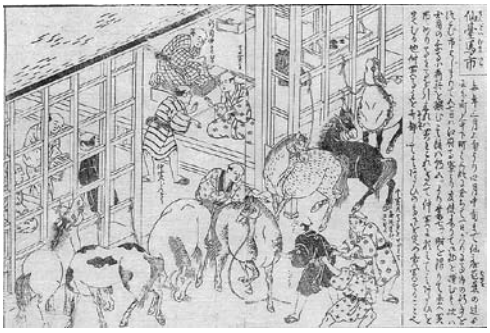
仙台市博物館
市史編さん室長　菅野　正道

仙台藩の名馬

江戸時代、仙台藩領は全国でも有数の馬産地でした。古代以来、陸奥国は名馬の産地として名高く、戦国時代でも越前国（福井県）の戦国大名朝倉氏は家臣たちが奥州から馬を求めることを禁じる法令を出すほど、奥州ブランドの馬は武士たちを魅了したのです。

江戸時代に入っても、仙台藩や南部藩の馬は引き続きトップブランドの地位を保ち続けます。仙台藩は、種馬や売買の対象となる二歳馬を登録・管理し、あるいは飼育する者に対して各種の助成を与え、また藩営の牧場を作るなど、さまざまな施策を講じて馬産の振興に努めていました。

そうして育成された馬の中からよりすぐった良馬を、仙台藩は幕府へ献上していました。献上された馬を毎年十月に将軍が見る「仙台馬上覧（せんだいうまじょうらん）」は幕府恒例の行事となっていたほどでした。



『日本山海名物図会』にある「仙台馬市」のようすを描いた挿絵。

国分町の馬市

こうした仙台藩領の馬は、藩が公認して開かれる馬市で、藩の管理の下で取引が行われました。その馬市で最も大きく、かつ重要視されたのが、仙台城下国分町で開かれた馬市でした。「仙台馬市」の名でも知られた、この馬市は、毎年三月上旬から四月中旬にかけて（現在の暦にすると四月から五月）の五十日、そして七月二十日からの五十日（現在の暦にすると九月から十月ごろ）の合計百日もの長期間にわたって開かれていたのです。

全国の特産物をまとめた『日本山海名物図会』（宝暦四年＝一七五四年）でもこの馬市が取り上げられ、まず幕府の役人、ついで藩の役人が馬を買い求め、一般の取引はその後に行われた、と紹介されています。

売買された馬の数は、年によって増減はありますが、春の馬市が千五百頭から二千頭、秋の馬市が千頭から千五百頭に及びました。最も多かったのは、天保元（一八三〇）年春で、二千六百三十八頭が取引されたと記録に残っています。

国分町の馬喰

馬市における取引では、馬喰（ばくろう）という専門業者が大きな役割を果たしていました。馬喰は、各地から馬を買い集め、馬市で売る仲買人で、文政四（一八二一）年には仙台藩内で五百二十二人いたことが確認されています。

仙台馬市にも多くの馬喰が関与していましたが、そのなかで指導的な立場にあったのが国分町の山崎屋です。国分町に集まる馬喰たちが泊まる「馬喰宿（ばくろうやど）」にも指定されていた山崎屋は、馬の取引で重要な役割を果たしていました。仙台藩では、馬の売却代金の半分を藩へ上納する決まりになっており、山崎屋は上納金のとりまとめに当たっていたようです。

こうして国分町の一大産業であった馬市に深くかかわった山崎屋は大きな財を成し、江戸時代後期には、藩から苗字を許されると共に、士分に取り立てられています。幕末の当主であった山崎平五郎は、東九番丁の浄土宗報恩寺が火災にあった際、その再建に大きな支援を与えたと言われています。

明治に入っても山崎平五郎は国分町の有力者の地位を保ち、郵便局の経営にも関与しています。また自由民権運動にもかかわった平五郎は、明治十四（一八八一）年ごろ、支倉常長が持ち帰ったローマ法王の肖像画（現在は仙台市博物館所蔵・国宝）が民間に流出した際、それを古道具屋から買い取っています。仙台藩の名産で形成された財力が、明治の仙台を動かす原動力の一翼を担ったと言えるかもしれません。

仙台市史

最新刊
5月中旬
発　売

特別編8 慶長遣欧使節

伊達政宗の外交使節・支倉常長の足跡が明らかに！

◆B5判 630頁　オールカラー　◆定価6000円（本体5714円）

お求め先　県内主要書店・仙台市博物館／㈱宮城県教科書供給所　TEL.022-235-7181　FAX.022-235-7183

お問い合わせ先　仙台市博物館市史編さん室　〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地　TEL.022-225-3074

国宝　支倉常長像